



助詞の分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 忠興 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000590

助 詞 の 分 類

高 野 忠 興

北海道学芸大学旭川分校国語研究室

Tadaoki TAKANO : Classification of Particles

目	次
1 助詞の定義	13 終助詞
2 助詞は活用しない語である	14 格助詞
3 格助詞とは何か	15 接続助詞
4 格とは何か	16 並立助詞
5 助詞が文節と文におよぼす力	17 連体助詞
6 文節のきれつづき	18 係助詞
7 詞のきれつづき	19 副助詞
8 辞のきれつづき (一)	20 準体助詞
9 辞のきれつづき (二)	21 助詞分類の体系
10 きれつづきによる品詞分類	22 助詞の接続
11 助詞分類の基準	23 わかちがきと助詞
12 間投助詞	

1

助詞の定義 この紀要にのせる論文は、題名に英訳をつけるきまりになっている。ここで取りあげる助詞を、英語で一体何というか、しらべてみると、後置詞 *postposition* ともいい、また不変化詞（小詞、小辞とも）*particle* ともいう。ほかにまだあるかもしれないが、私が調べたところでは、この二つがみつかった。助詞にびつたりあてはまる品詞は、西洋語に、ない。しかし、それに似たはたらきをするものをあげると、前置詞・副詞・接続詞があり、それに格変化と語順の或るものをくわえあわせれば、助詞のはたらきの大体がいつくせる。それらの品詞を総称して不変化詞というが、このものは品詞のグループにつけた名であつて、一品詞の名ではない。けれども助詞のはたらきを示す名としては、いみがある。

つぎに、助詞は位置からいうと、いつも詞のあとにつき、文節のあとに位置するので、後置される性質があるといつてよい。後置詞 *postposition* とよぶのは、助詞の位置を示す名としては、いみがある。

不変化詞 *particle* といえ、一品詞の名にならない。後置詞 *postposition* といえ、助動詞にもあてはまることで、助詞ひとりの特性を示す名ではない。どちらも助詞をびつたりといいあてたことばではない。それよりも、むしろ、助詞を訳さないでそのまま‘助詞’というか‘テニヨハ’といつて通した方がよいかも知れない。助詞とは何か？それは、はたらきは不変化詞であつて、位置は後置詞であるものだ。日本語の文法で助詞を、‘活用しない辞’と定義するのは、このことである。

日本語の中だけで考えていると、助詞というものは漠然とした、つかみどころのないものである。接着剤か何かのように、語ごとについており、文節ごとにふくまれており、文中いたるところに散在し、そのいたるところで微妙なはたらきをしており、これでは、助詞の限界もはつきりしないし、特性もつかめないし、助詞の概念もあいまいになる。また、助詞を大まかにもくみる見方もある。日本語は、詞に辞を加え、それにまた詞を加え、辞を加えて、文をつくる。語はすべて、詞と辞との二つに大別され、両者が、あたまの中で、交流電気のように 詞—辞—詞—辞—詞……と交代してゆくところに、現実の具体的な言語が成り立つ。その辞の中の主要なものが助詞であるとする。このような見方もある。

助詞を、どこにでもつけられる膠のようにみるのも、助詞に対する一面的評価であり、過小な評価であるが、また、助詞を、体言や用言のような自立語・自用語と同等な重さにおいてみるのも、助詞に対する一面的な過大な評価であると思う。日本語の中だけで考えていると、どうも、このような一面的な、偏った考えにおちいりやすい。

山田孝雄の助詞分類は、画期的な分類であつたが、その分類名をあげてみると、間投助詞・接続助詞・格助詞・副助詞・係助詞・終助詞となつている。その名をきくだけで、大体機能がわかるように、名づけられているが、一つだけ、ちよつとわかりにくい名がある。それは副助詞である。その副というのとは何か。副うといういみか、副詞的といういみか、一寸見当がつかぬ。間投とか、接続とか、終とかいう名に準ずれば、副も‘そう’といういみのおもえるが、これは実は副詞的といういみである。山田孝雄は、日本文法講義 191 で、つぎのようにのべている。

副助詞という名目は、著者のはじめて命名せしものにして、その内容は、実に著者数年研究の結果による。この種類は、その意義において、大略、属性の副詞に対比するものにして、おのづから、英語などの副詞に似たり。試みに、これを訳せるものをみよ。大てい、副詞を用いて、これにあてたり。この点よりみて、副助詞の命名は、穩当をかかずというべし。

これをみると、山田孝雄が、副詞的といういみで、副助詞の名をたてたことがわかるし、また彼が、英文法と対比しながら助詞の研究をすすめていたことがわかる。

2

助詞は活用しない語である 日本語の品詞のなかで、助詞ほど種類の多いものはない。助詞をわけると、品詞の数と同じぐらいの種類が出てくる。そんなに細かくわけなければならぬほど、助詞の性質は種々雑多だ。分類するには、これらの性質をみわたして、すべてがもれることのないように、分類のあみをはらなければならぬ。

日本語の助詞は、内容的にいうと、西洋語の不変化詞 particle にちかい。それは前置詞であり、副詞であり、接続詞であり、間投詞であり、接辞であり、冠詞である。日本語の助詞も同様、いろんなはたらきをするものがあつて、副助詞・係助詞・準体助詞は副詞ににたはたらきをし、接続助詞は接続詞ににたはたらきをし、間投助詞は感動詞ににたはたらきをし、終助詞は助動詞ににたはたらきをする。しかし、助詞の内容的なはたらきは、これにとどまるものでなく、西洋語でいえば、(1)名詞の格変化、(2)不変化詞のはたらき、(3)語順のはたらきとを加えあわせたものにひとしい。

語順のはたらきというのは、西洋語で語順をかえることによつて、疑問や反語をあらわすのに対し、日本語では終助詞‘か’をつけることによつて、その意味をあらわすことがあるから、‘か’は語順倒置に相当するというわけである。

助詞の分類

さて、不変化詞は、前置詞・副詞・接続詞がその主要なものであるが、実は、これらのものは全く同類のものであつて、たがいに同じようなことを、ちがつた立場で、あらわしているにすぎない。たとえば since などは前置詞であり、副詞であり、接続詞である。その他 almost, about, after, because, while, for などの語は、ほとんどみな前置詞・副詞・接続詞の全部をかねるか、またはその二つをかねている。これらが不変化詞として一括されるのも理由があることである。

Jespersen は、品詞をわけて、つぎの 5 品詞とした。

1. 実詞 (固有名詞をふくむ)
2. 形容詞 (1 と 2 とをあわせて、名詞としてもよい)
3. 代名詞 (数詞および代名詞的副詞をふくむ)
4. 動詞
5. 不変化詞 (いわゆる副詞・前置詞・接続詞・間投詞をふくむ、1 から 4 までのどれにもふくまれない語全部からなる)

このように Jespersen は '文法の原理'⁹⁴において 5 品詞をわけ、それ以上にくわしくわけなかつた。副詞・前置詞・接続詞・間投詞を区別しなかつた。接続詞は前置詞の一種であるといつておる。'接続詞は文前置詞 sentence preposition である'。'接続詞なるもののために、その名を設けるのは、全く余計なことだ。接続詞という名をとどめておくとすれば、単に伝統にもとづくにすぎないのであつて、学的必要にもとづくのではないのである。われわれは、そのために接続詞を品詞と認めてはならないのである'。とまでいつておる。

西洋語の副詞・前置詞は何からおこつたかという、格変化からおこっている。名詞の格のうち、副詞的な格から副詞がおこつた。副詞的な格とは、対格 (を格 accusativus) 従格 (造格, 奪格, より・で・と格 ablativus) であり、対格は動作の目的をあらわし、従格は副詞的な限定・説明をする。また、前置詞も、これらの副詞的な格からおこつたといわれる。ただ、前置詞は、その格の名詞との関係が常に緊密で、はなれにくく、副詞がその格の名詞から全く独立してしまつても、まだこれはそれにいつまでも従属し、ともなうのである。前置詞は、大い実質概念たる名詞の空間的・時間的關係をあらわすものだから、'……において、……から'を示す従格へつづくか、または '……へ(ゆく)'を示す対格へつづくか、そのいずれかの格へつづくことを要求するものが多い。吳茂一: ラテン語小文典 57

副詞や前置詞は、名詞の格をくわしくあらわすために、格をあらわす語尾だけでは足りなくなり、付随的に名詞につけ加えられたものが、独立して品詞となつたのである。ところで、日本語の助詞はどうか。

助詞の中にも、副詞ににたはたらきをする副助詞・係助詞・準体助詞がある。また接続詞ににたはたらきをする接続助詞・並立助詞がある。感動詞ににたはたらきをする間投助詞・終助詞がある。連体詞ににたはたらきをする連体助詞がある。しかし、格助詞は何ににているだろうか。日本語においては、格助詞だけは、これににたような品詞をもたない。どの品詞にもにいていない。格助詞だけが、助詞特有のものなのである。助詞特有のはたらきをして、それ以外のことをしない。これが格助詞であつて、格助詞こそは、助詞の中の助詞であり、最も助詞らしい助詞である。助詞の太宗である。格助詞は、西洋語の格変化と前置詞とをかねたはたらきをする。格変化の語尾が格助詞に当り、前置詞が格助詞に当るが、ただ、日本語では、前置でなく、後置されるといふちがいがあつた。

3

格助詞とはなにか 格助詞は体言のあとにつき、それをあとの用言につづけてゆく助詞である。

格助詞は、文の意味上の大筋、すなわち文の論理に関係する。文の論理関係をあらわす。文の論理は、主として、体言と用言とがあらわす。格助詞は、その体言について、体言のしめる位置や、立場や場合を明らかにするものである。体言が、文中で、どのような位置をしめるかを明らかに示すものが格助詞である。体言は、文中で、どのような位置をしめるか。用言に対しては、まず主語の位置をしめる。また、連用修飾語の位置をしめる。また他の体言に対しては、連体修飾語の位置をしめる。そういった位置をしめすものが格助詞である。^{#1}

日本文法で格というのは、西洋文法の casus (case) の訳で、そのいみは、位置・立場・場合・事情・環境ということである。文法上は、名詞が文中でとる立場といういみに用いられる。その立場はいくつかあつて、言語によつて、その数がまちまちであるが、主なものは大体共通している。一つの名詞は、立場立場に応じて、それぞれの語尾をもつから、立場がかわるごとに語尾がかわるわけである。それを格変化という。格変化は名詞・代名詞・形容詞にある。そして、名詞の格変化が基本になる。形容詞の格変化は名詞にあわせて変化するので、名詞が基本になる。^{#2}

日本語で格をあらわすものは格助詞である。格助詞の数は 9、したがつて日本語における格は大体 9 種あるということになる。くわしく考えれば、もつと多くの立場、すなわち格がある。もつと複雑な格もあるが、しかし、普通に用いられる格は 9 種である。それに、連体助詞 ‘の’ を一つの格と考えることもできるから、これをいれると、10 種になる。格助詞はすべて、体言が文中で他の語に対してとる立場をあらわす。その体言が他の語に対し、どんな関係をもつかをしめすためにつけられるものであるから、格助詞はいつも体言のあとにつくという性質をもっている。

体言が文中でとる立場、文中においてしめる位置という、まず主語の位置をあげなければならぬ。‘何が どうする’の‘何が’にあたる位置が主語の位置である。そのつぎに修飾語の位置をあげなければならぬ。これはいわゆる客語や補語の位置である。‘何が 何を どうする’の‘何を’という位置は、動作の直接目的をあらわすもの。‘何が 何に 何を どうする’の‘何に’という位置は動作の間接目的をあらわすもの。‘何より どうする’‘何で どうする’‘何と どうする’の‘何より’‘何で’‘何と’という位置は動作の副詞的限定・説明をするもの。また‘何が 何だ’の‘何だ’という位置は述語の位置である。この格は主語の格と同じ形であるが、格助詞はつけない。そのかわりに助動詞をつける。以上は文の論理に直接に関係する格である。このほかに文の論理に直接関係しないで、間接に関係し、それから独立した格がある。‘何何よ?’という位置は呼びかけの対象をあらわすもの。つまり独立語の位置であつて、これを呼格という。この格も主語の格と同じである。格助詞‘よ’‘や’はつけることもあり、つけないこともある。以上は文の論理に直接間接に関係する位置である。

これに対して、やはり文中において、しめる位置の一つにちがいないが、文の論理にではなく、主として語にだけ関係する位置がある。‘何の 何’の‘何の’という位置がそれであつて、体言の形容詞的限定・説明をするものである。

以上のべた、体言の文中においてしめるいろんな位置——つまり格を、ここにまとめて一覧表にしてみよう。

格の種類

格	文に直接に 関係するもの	主語.....が.....主格.....nominativus						
		修飾語..... <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td rowspan="3" style="vertical-align: middle;"> 直接目的語... (客語) </td> <td>を.....対格.....accusativus</td> </tr> <tr> <td rowspan="2" style="vertical-align: middle;"> 間接目的語... (補語) </td> <td>に.....与格.....dativus</td> </tr> <tr> <td> 副詞的限定... 説明 </td> <td>より, から, ... で, と..... 從格 (造格, 奪格).....ablativus</td> </tr> </table>	直接目的語... (客語)	を.....対格.....accusativus	間接目的語... (補語)	に.....与格.....dativus	副詞的限定... 説明	より, から, ... で, と..... 從格 (造格, 奪格).....ablativus
		直接目的語... (客語)		を.....対格.....accusativus				
				間接目的語... (補語)	に.....与格.....dativus			
副詞的限定... 説明	より, から, ... で, と..... 從格 (造格, 奪格).....ablativus							
述語..... <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>体言的述語.....</td> <td>主格におなじ</td> </tr> <tr> <td>独立語.....</td> <td>よ, や.....呼格.....vocativus</td> </tr> </table>	体言的述語.....	主格におなじ	独立語.....	よ, や.....呼格.....vocativus				
体言的述語.....	主格におなじ							
独立語.....	よ, や.....呼格.....vocativus							
文に間接に 関係するもの	修飾語..... <table border="0" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td>形容詞的限 定説明</td> <td>の.....</td> <td>属格(生格, ... 所有格).....genitivus</td> </tr> </table>	形容詞的限 定説明	の.....	属格(生格, ... 所有格).....genitivus				
形容詞的限 定説明	の.....	属格(生格, ... 所有格).....genitivus						

4

格とは何か 文は判断である。判断である文においては、概念が組合わされ、統一されて判断ができています。文において、いろいろの概念が主となり、述となり、客となり、賓となり、目的となり、対象となり、いろいろの位置におかれて、組合わされ、統一されている。そのいろいろの位置を格という。ところがそういう判断にまでいたらないで、感動的統一に終始する文もある。それは感動文である。これは概念が大い一つだが、それでも一つの位置、立場、つまり格をとつていとみなされる。それを呼格とよぶ。

人が考えるのは、現実世界を頭の中に映して、像にうつして考えている。現実世界で直接的に認知されるのは空間関係である。時間は容易に認知しがたい。これはよほど抽象や思考を重ねないと、とらえられない。そのため、ことばも空間関係のことばが発達して、時間をあらわすことばは、あとからできる。時間をあらわすには、空間関係のことばを第2義的に適用する。‘さき’‘まえ’‘あと’‘ま’などということばにしても、空間的意義が第1義であり、時間的意義は第2義である。現実の諸事物の相対的空間的位置には、ある種の秩序がある。一つのもが二つの場所を同時に占めないとか、二つのものが同一の場所を同時に占めないとか、一つのもが同時に反対方向に動かないとか、何か一応の秩序がある。人がものを考えるのは、やはり、こういう空間的立体的秩序を直覚し、つぎに頭の中でも、事物の像を、そのような秩序にならべて、考える。頭の中で実体概念をこのような秩序にならべて考える。詞をこの秩序にならべて考える。名詞をこの秩序にならべて考える。名詞を、格において考える。名詞が文中において占める格というのは、この秩序のことである。‘だれが だれを どうした’‘なにが なにを どうした’‘だれが だれと だれを だれに どうした’‘なにが なにと なにを なにに どうした’といったような関係はつまり格である。その関係を、いろいろの格助詞であらわす。これらの概念を名詞で、その関係を格助詞であらわす。この立体的な空間は上下、前後、左右しかないから、格の数はそう沢山あるわけがない。大体きまつたものだ。その中でも、よくつかう格は一そう限られている。現実世界は誰にとつても同じ世界だから、格も誰にとつても同じであり、共通でなければならぬ。誰でも同じ格で概念を考えるはずだ。それだから、格は、古今東西、どこにこのことばでも同様であり、共通である。梵語で8格、ギリシヤ語7格、ラテン語6格、ロシア語6格、ドイツ語4格、英語4格といった風に、格はある。語尾の格変化は近代になるほど簡単になつてはいるが、これは格が減つたのではなくて、格をあらわす語尾変化の様式が減つただけである。格をあらわすのに語尾変化ばかり用いないで、格をあらわすことを専門とする前置詞を用いてあらわすように、かわつただけである。格は、そのため、一そう精密にあらわされるようになつたといえよう。

人はすべて、詞を格において考える。格におかずに、詞を考えることはできない。人は概念を詞にあらわして考える。詞にあらわさずに、概念を考えることはできない。しかし、人は格を辞にあらわさずに考えることができる。辞にあらわさずに宙で、直覚的に、格を考えることができる。日本語は、古代において格助詞を用いなかつた。格助詞を用いなくても、格は考えられる。格は詞とともに考えないではおられないものである。辞にあらわさなくても、考えられる。詞がある以上格はある。事物があれば秩序があり、概念があれば関係があり、詞があれば格がある。古代において、格はあらわされませんでした。実は、格が語順の上にあらわされていたとおもわれる。しかし、時代をおつて、表現がくわしくなるにつれ、格をはつきりあらわすしるしが必要になり、日本語にも格助詞があらわれるようになった。

空間的關係は直感的には自明だけれども、ことばはこの自明な關係を、絵で示すように、空間的に、同時にうつすことはできない。線条的に、時間的にうつすほか、方法がないのである。人は概念の空間的配置、すなわち詞の格關係をのべるために、面を線にいかえなければならぬ。空間を一度に描くことができないから、秩序にしたがつて描かなければならぬ。前→後、左→右、上→下、近→遠、……このように線としてならべられたことばには、当然のことながら、あとさきの序列がきまる。手近かなものからさきへのべ、遠いものはあとへのべ、あるいはその逆順にのべられる。そして、強調することばがさきへのべられ、そうでないことばは、そのあとへのべられる。強調されるものがさきに立つ。主語とは強調されたものである。だから、主語はさきに立つ。

現実の外界は同一だから、概念の配置も同様であるにちがいないのに、線条としてたぐりだされたことばの序列は、かならずしも同一に行かず、民族ごとに、ことばごとに大にちがうのは、どうしたことか。これは、おもしろいことがいだが、しかし、本質的には大したことはないとおもう。日本人はきものを考えだし、中国人は中国服を、朝鮮人は朝鮮服を、アイヌ人はアツシを、西洋人はセビロを考えだした。日本人は、ノコギリをひいてつかうし、カンナをひいてつかう。それらをひいてきり、ひいてけずるようにつくつておる。西洋人やロシア人はノコギリもカンナも、おしてつかう。それらを、おしてきり、おしてけずるようにつくつておる。日本人はマツチを向うへするが、西洋人はこちらへむけてする。このような風習のちがいは、大変異様で目立つけれども、しかし、まづたく異質的なことではない。本質的にはちがいのないことである。服をきている当人は、おなじ5体のそなわつた人間である。ノコはノコだし、カンナはカンナだ。外的な環境がすこしかわつていたから、すこしかわつた風習を生じたにすぎない。その環境が同様になると、たちまち風習も同様になる。いま日本人にせよ、アイヌ人にせよ、朝鮮人にせよ、どれほど古来の服装を保つて着ているだろうか。世界各国の人がひとしく共通にセビロをきている。これは流行ともいえるだろうが、それよりもつと力強い長期にわたる作用によるものである。それは共通の環境におかれると、民族の風習も共通になるということだ。ことばだつて風習の一種であるから、共通になるみこみはある。

語順がことばによつてまちまちであることはおもしろいことだが、大したことはない。本質的なちがいはない。ことばがちがうことは、全く異質的なことでなく、ある共通性の上に浮ぶ多少のちがひである。これは共通化するみこみのあるもので、可変的な性質がある。いまの不便や欠点は改めうる余地があるものだ。片言のような日本語が文献にあらわれてから2千年しかたつていない。まだこれからさき何万年あるかわからぬ。さきの方がながいのである。たとえば、日本語の述語がいつも文の終に来て、文意を不明にするという非論理的性格も、今後改められる余地がある。それは決して日本語の宿命的欠陥ではない。

語順についていえば、ことばを線条的に表現した場合、格は語順によつてあらわされた。最初に主語がのべられ、あとで述語がのべられた。重要な詞から順次に線条的にならべてゆくことによつて格関係があらわされ、特別に格をあらわすことばを用いなかつた。それが古代に多くみえる日本語の用法である。ろうあ者の間で、指話法がおこなわれるが、これはおもな詞を印象の強いものからさきに、強調すべきものからさきに、順にならべてゆくのだが、その間に格をあらわすことばをはさまなくても、語順によつて十分格関係がわかるようになっていく。ところが、その語順は、指話法は自然の語順をとるのだが、それが日本語の語順と往々にしてちがうことがある。指話法の語順は、むしろ、西洋語や中国語の語順によく似た語順をとる。その方が自然でわかり易いのだ。ところが、日本語の語順が、残念ながらそれに反していることは、日本語のそれがいかに不自然なものであるかということを示している。しかし、こんなことは、日本語の宿命性格ではない。なおしうることであるし、将来かわる可能性のあることである。

日本語ははじめのうちこそ、格助詞を用いることなしに、詞をならべただけで、格関係をあらわしていたが、考えが精密になり、表現がこまかくなつてくると、それではまにあわなくなり、ついに、格をあらわすことばを用いるようになった。格助詞は、間投助詞や名詞などのほかのことばから借り入れられた。格助詞のうち、最も早くあらわれたものは、属格（生格、所有格）をあらわすものであろう。詞と詞との関係のなかで、この関係が一番必要度が高い。詞と詞とが一番密接した関係にある。この関係はほかの主格や対格や与格や従格（奪格、造格）の示す関係に比べると、最も緊密な結合をもつ関係であつて、ほかの関係は、これに比べると、これほどの結合をもたない。これは人間社会において、昔から、所有関係が一番大事なこととされていたからではないかとおもう。こういう特殊な結合をもつた関係だから、これを一列に語順の上にならべたのでは、ほかの関係とひとしなみになつてしまつて、その特殊性があらわせない。それで、この関係だけは、早くから区別してあらわすようになったとおもわれる。

そのつぎが主格である。主格は最も必要度の高い関係であるけれども、語順の上において、十分これをあらわすことができる。対格も同様である。主格と対格とは相対する格である。しかし、主格は、長い文にふくまれ、また従属文などにふくまれるようになると、どうしても主格たることのしるしが必要になつてくる。日本語では、主格を示す格助詞は第2格を示す格助詞‘の’‘が’から借りて来ている。対格を示す格助詞は、間投的なことば‘を’から借りている。それから、主格・対格などとならんで同時に、与格・従格その他が生ずる。これらの中には名詞から借入れたものがある。

このように、格助詞の成立は、語に関係するものが早くでき、文に関係するものがおそくできたとおもわれる。論理の発達するにつれて、格をくわしくさだめる必要がおこり、これまでつかうことのなかつたことばである格助詞を用いるようになる。そのとき、どこから、そのことばを借り入れて来るかという、すでにあつたことばの中から、借りてきたものが多い。すでにあることばといへば、名詞がある。ほかに、感動詞や間投助詞や終助詞がある。これらは、感動をあらわす、あいのてのような調子のいい音である。これをある格につけていると、そのうち、その特定の格をあらわすようにきまつてしまう。対格の‘を’などはそのようにしてできた。また、地名のあとに、附近といういみをあらわす‘へ’をつけて用いているうちに、その‘へ’が方向をあらわす格助詞になつてしまつたという例もある。

格助詞のうち、対格や与格はつねに用言につづいてゆく格だ。この格をいろいろつかううちに、副詞的なことばがつけくわえられてくる。そして、係助詞ができる。‘これをとらせる→これをばとらせる’‘ゆめにみる→ゆめにこそみれ’ 対格・与格は副詞的な格だ。その副詞的な格が

ら、係助詞が生まれ、それが用言と対応して係り結びの関係をもち、用言との関係が密接になる。また、これらの格にとりもなつて、係助詞よりも一そう独立的な副詞が生まれる。同様にして、これらの、用言に深い副詞的な格の周辺に接続助詞が生まれ、そのうち、一そう独立的なものができて、接続助詞が生まれる。格助詞→関係辞→関係詞

さらに助詞が発達すると、体言の資格をもつところの副助詞や準体助詞があらわれる。

このようにして、辞には、用言に近い助動詞；体言に近い副助詞・準体助詞；副詞・連体詞・接続詞に近い係助詞・連体助詞・並立助詞・接続助詞・格助詞；感動詞に近い終助詞・間投助詞があつて、あらゆる品詞の母胎をなしているような感じがする。少くとも、関係辞の太宗は格助詞であつて、格助詞の周辺に關係辞がつくれ、關係辞が独立して關係詞ができたものでないかと、おもわれる。

5

助詞が文と文節に及ぼす力 文をつくる直接・最高の単位に、文節がある。文節をつくる単位に、語がある。文節をつくる時の語の用法のちがいが、語は、詞と辞とにわけられる。

文節は、語からつくられ、あるばあいは、ただ一つの語から、大ていのばあいは、多くの語から、つくられる。そこで、文節はそれ自身がいかにつくられるかという文節構成の問題と、文はそれ自身がいかにつくられるかという文構成の問題とがおこってくる。しかるに、助詞は辞の一種であり、いつも詞にしたがつてあらわれ、詞とともに文節をつくるものである。すると、ここに、詞は文節をつくる時、どんな語につくか、どんな語について文節を成すかという文節構成の問題がおこるとともに、その助詞をつけてつくられた文節は文をつくる時、どんな役目をするか、その役目をする上に、その助詞がどういう風に関係しているかという文構成の問題がおこってくる。

助詞がどんな語につくかということによつて、助詞を分類することは、富士谷成章以来、鈴木胤大槻文彦らによつてよく考えられた。また、文節をつくつた助詞が、文の構成において、文節のはたす役目に、どういう風に関係しているかという点にもとづいて分類したものには山田孝雄があるが、その分類は原理不統一で混乱しており、複雑のきらいがある。これを簡明にしたものが橋本進吉の分類である。本稿はその用語と分類にしたがつたものである。^{※3}

6

文節のきれつづき 実際のことばに用いられる文節はこれを二つに分けることができる。一つは、そこで意味がきれると感じられるもの、もう一つは、きれずに、意味がつづいてゆくと感じられるもの。この二つである。一体、一つの文には、意味がきれ、終止するところがある。一つの文をくみたてる文節は、意味がそれからそれへとつづいてゆき、きれぬ文節にいたつてはじめて文が終止するものである。このようにして、一つの文は、あるまとまつた意味をあらわすことができる。一つの文をくみたてる文節は、意味の上から、たがいに連絡しあつているが、その一つ一つについてみれば、その意味が直接につづいてゆくものと、そうでないものがある。直接につづく二つの文節において、甲の文節が乙の文節へつづくとき、甲を中心にして‘甲は乙につづく’。または‘甲は乙にかかるといい、乙を中心にして‘乙は甲につく’、または‘乙は甲をうける’という。

実際のことばにおいて、文をくみたてる文節は、きれぬかつづくか、どちらかである。けれども、文節を一つ一つとりだしてみたときは、別である。そのときは

きれると感じられるもの

つづくと感じられるもの

があるほかに、まだ

きれるかつづくか不定のもの

がある。‘きれると感じられるもの’は、いつもきれる文節として用いられる。‘つづくと感じられるもの’は、いつもつづく文節として用いられる。いつもそういう風に用いられるから、そういう風に感じられるのである。そして‘きれるかつづくか不定のもの’は、ときとしてはきれる文節として用いられ、ときとしてはつづく文節として用いられるから、一方にさだまらず、不定に感じられる。‘不定のもの’は、それが実際におかれた文中の前後の関係で、どの様にでも、どちらにでも、なることができるのである。

意味がつづいてゆくにしても、どんなものにでもつづくのでなく、いろんなつづきかたがある。つづく文節を、それだけとりだしてみると、どういうことばにつづいてゆくかに感じられるものである。‘なかなか’‘しかし’‘はげしく’などは用言か用言的なものにつづく。‘どんな’‘ならびに’などは体言か体言的なものにつづく感じがある。それというも、こういう文節はこういうことばにつづくというならわしができているから、そう感じられるのである。このように、文節には、きれつづきの感じがともなつているものである。

7

詞のきれつづき このようなきれつづきの感じは、文節にともなうばかりでなく、語自身にもともなう。

第一に、語のうちの一つである詞についてみると、つぎのようである。

用言は、はつきりしていて、きれつづきを自らのいろいろのちがつた形——すなわち語形変化であらわす。あるばあいは、いいきりになつてきれ、あるばあいは、いろいろの関係をもつて他につづく、……………(1)

体言は、それ自身はきれつづきをあらわさない。きれつづき不定である。それだけで文節をつくるばあい、きれつづきは、それ自身でなく語順や音調などの外的手段であらわされる。辞をつけて文節をつくるばあい、きれつづきは、辞によつてあらわされる。……………(2)

副詞・連体詞・接続詞は、いつもつづく、これらのものは、それ自身何ら特別のしるしをもたないけれども、いつも意味がつづいてゆくという点で、みな共通している。それだけで文節をつくるばあいも、他の語とともに文節をつくるばあいも、いつもつづく、これらのものを一括して**関係詞**となつける。……………(3)

感動詞は、いつもきれる。必ずきれるというのがこの詞の特徴である。断止詞ともいうべき性質の詞である。……………(4)

詞の性質は以上のとおりだが、そのきれつづきの関係によつて、詞を区分すると、つぎのようになる。

詞 の 区 分

- (1) きれつづきを自分であらわすもの……………**用 言**
- (2) きれつづきを自分ではあらわさないもの……………**体 言**
- (3) つづくもの……………**関係詞** (副詞・連体詞・接続詞)
- (4) きれるもの……………**感動詞**

8

辞のきれつづき (一) 第二に、語のうちの他の一つである辞についてみると、つぎのようであ

る。

助動詞は、はつきりして、きれつづきを自らのいろいろのちがつた形——すなわち語形変化であらわす。あるばあいはいきりとなつてきれ、あるばあいはいろいろの関係をもつて他にづく。……………(1)

助詞は、性質がいろいろである。きれつづきの関係によつて区分するとこれには3種がある。

きれつづきを自分であらわさないもの……………(2)

つづくもの……………(3)

きれもの……………(4)

9

辞のきれつづき(二) (1) きれつづきを自分であらわすものは、活用するものであつて、つまり助動詞である。これは活用によつてきれつづきをあらわす。この点、助動詞は詞における用言ににている。そこで、これを用言に対して用辞となづける。

(2) きれつづきを自分であらわさないものは、それ自身きれつづきの意味をもたず、きれつづきが不定である。この点、助詞のこの類は詞における体言ににている。副助詞・準体助詞がこの類である。そこで、これを体言に対して体辞となづける。つぎの例をみると、これらのものがきれることもあり、つづくこともあり、きれつづき不定なことがよくわかる。‘私だけ 知っている’においては、つづき、‘私だけ に知らせてきた’においてはきれそうに感じられ、‘知っているのは私だけ’においてはきれしてしまう。みな体言または体言相当のものについて、その体言とともに全体として単独の体言のようになり、体言的にも副詞的にも用いられる。これに属する副助詞・準体助詞には、体言から転成したものが多い。数量をあらわす体言から転成してきたものが多い。そして数量や程度や時間・空間の限定をあらわすことが多い。

(3) つづくものは、接続助詞・並立助詞・連体助詞・格助詞・係助詞の類。たとえば‘ゆくが’‘これと’‘これの’‘これが’‘これは’などの文節はつづくものと感じられる。‘ゆく’とか‘これ’という語にはつづく感じがなく、これらの文節につづく感じがあるのは、これらの助詞に、つづく感じがあるからだ。これらの助詞は、いつも意味のつづいてゆく点が詞における関係詞ににている。そこで、これらの辞をまとめて、関係詞に対し、関係辞となづける。

(4) きれるものは、終助詞・間投助詞の類。たとえば‘そうか’‘そうだよ’という文節はきれる感じがする。その助詞が終止するところに用いられる助詞だからである。いつもきれるといふ点、これらは詞における感動詞ににている。そこでこれらの辞をまとめて、感動辞となづけてもよいが、形式的職能的な名をとつて断止辞となづける。

辞の性質は以上のとおりだが、このきれつづきの関係によつて辞を区分するとつぎのようになる。

辞の区分

(1) きれつづきを自分であらわすもの……………用辞(助動詞)

(2) きれつづきを自分であらわさないもの……………体辞(副助詞・準体助詞)

(3) つづくもの……………関係辞(接続助詞・並立助詞・連体助詞・格助詞・係助詞)

(4) きれるもの……………断止辞(終助詞・間投助詞)

以上のうちの(2)(3)(4)が助詞である。

きれつづきによる品詞分類 文節を一つ一つとり出してみたときに、文節にきれつづきの感じがともなうと同様に、語を一つ一つとり出してみたときにも、語にきれつづきの感じがともなう。語は詞と辞とにわけられるが、詞にも辞にもきれつづきの感じがともなう。辞のうちの助詞についていえば、助詞にもきれつづきの感じがともなうのである。助詞にともなうきれつづきの感じには3種あり、一つはきれもの…(4)、二つはつづくもの…(3)、三つはきれつづき不定のもの…(2)、この3種であり、種類は豊富だ。

以上、きれつづきの関係によつて、詞を区分し、辞を区分してきたが、いまこれらを表にして対比してみよう。

きれつづきによる品詞分類

	詞	辞
(1) きれつづきを自分であらわすもの	用 言	用 辞 助 動 詞
(2) きれつづきを自分であらわさないもの	体 言	体 辞 {副 助 詞 準体助詞}
(3) つづくもの	関係詞 {副 詞 連 体 詞 接 続 詞}	関係辞 {係 助 詞 連 体 助 詞 並 立 助 詞 接 続 助 詞 格 助 詞}
(4) きれもの	感 動 詞	断 止 辞 {終 助 詞 間 投 助 詞}

助詞分類の基準 助詞は文中における文節のきれつづきをしめし、それにあずかるものである。どういふ感じでつづくかを一一いいあらわすには、助詞の力によることが多い。だから、助詞を分類するには、是非このようなきれつづきということを基準にしなければならない。

このきれつづきに関する性質は、一つの文節を全体としてみたときにあらわれるものだが、それと同時に、助詞が詞について文節を成すとき、どんな詞につくかという点からみたちがいもある。これは一つの文節の内部の構造に関係することで、以上にのべたこととはやや性質がちがうが、しかし同時に、これは、その文節の他の文節へのつづきように関係があるものである。たとえば、体言にだけつく助詞は、体言を中心としてつくられた文節の他の文節に対する意味上の諸関係をあらわし、用言にだけつく助詞は、用言を中心としてつくられた文節の他の文節に対する意味上の諸関係をあらわす。体言を中心としてつくられた文節の他の文節へのつづきようは、用言を中心としてつくられた文節の他の文節へのつづきようと趣きがちがう。したがつて、体言にだけつく助詞のあらわす関係は、用言にだけつく助詞のあらわす関係と趣きがちがう。これらの区別を、意味や内容の上からいいあらわすことはむずかしい。それよりも、どんな種類の語につくかということでは、はつきりして、実際的である。⁴

そこで、分類の基準としては、助詞のきれつづきということと、どんな語について文節をつくるかということと、この二つをとる。

研究をすすめる上に第一に資料とすべきは現代のことばである。現代のことばに対するわれわれの知識は最も完全であり、直接的であつて、そのことばのもつ意味や感じははつきりとよくわかる。これに対し、過去のことばは、現代のことばを土台として推測することによつて、知りうるばかりであるから、どうしても不確かで不明瞭な点のあることをまぬかれない。

間投助詞 **ね な さ よ だ だな です ですね**

きれる助詞 体言・用言・副詞、いろんな語につく、用い方が自由で、文中となく、文末となく、どこにでも自由に用いられ、とにかく文節の終に来るものである。つづく文節にも、きれる文節にもつく。

文節のきれめについて、その一ふしごとに人によびかけるような意味をあらわす。その場所でのイントネーションも尻上りである。用い方が自由で、いろんなことばの間に用いられるものを含み、いろんなものがこの中に入る。他の種類に入らない助詞をあつめた雑の部の観がある。しかし、反面、このごたごたした全体が実は助詞の源泉であつて、このものが助詞の元祖をなし、これからいろいろの助詞がわかれ出たともいえるのである。

この助詞は、つづく文節にも、きれる文節にもつく。きれる文節についたばあいはどうかという、たとえば‘きれいだね’‘かえつたのさ’というばあい、助詞の意味もきれ、文節の意味もきれ。ところで、つづく文節についたばあいはどうかという、たとえば‘それがね、……’‘そうしてさ、……’というばあい、助詞の意味はきれるが、文節の意味はきれないでつづいてゆく。この助詞のあるところで、助詞としては一応音もきれ意味もきれるが、イントネーションは文の終止するときとはちがつて、中止するときと同様である。文の終止をあらわすのでなくて、文節の終止をあらわすのであるといえよう。

この助詞は、文の論理的な大筋に関係しない。個々の文節について、それをつよめ、たしかめ、念をおすはたらきをする。感情的な色彩をそえるものである。この助詞の音の調子も尻上りで上つて居り、念をおし、つよめ、よびかける調子がある。

ほんとにね、こまりましたよ。

そんなことはな、百も承知の上だ。

鈴木という人がよ、たずねてこなかつたかい？

それがだ、どうもうまくゆかないんだ。

それからですね、例のことはお忘れなく。

間投助詞は終助詞と同類のもの、同一性質のものであつたが、用いられる場所が一方は文中であり、他方は文末であるところから、その役目にも軽重のちがいを生じた。文末は陳述の行われる場所であるから、文末に来る終助詞は陳述に関係するものも生じ、そういうものは間投助詞とちがつて文の論理に関係することとなる。

間投助詞は、連体助詞には、そのあとにつく、連体助詞のあとにつくものは間投助詞以外にない。

終助詞 **よ ぞ か さ え せ い ろ と も な ね の
の に て て ば て ね わ や と も も の か**

きれる助詞 用言につくものといろいろの語につくものがある。文末にある。

きれる文節につき、そこで文がきれるとまる。その助詞があると、そこで文が終止する。文末にだけ用いられる。

主として用言につく。述語となるべき用言や用言的なものにつくのが普通。イントネーションは尻下りでおちつく。間投助詞と同じ語もあるがイントネーションがちがつている。

これにはまいりましたね。

助詞の分類

行くな。(禁止) 行きな。(なさいの意・命令) 忘れないな。(たしかめ)
いまに来るさ。
もうないよ。
それをもつて来て。(て下さいの意)
もうしないつてば。(ていえばの意)
忘れずにもつてきてね。(て下さいねの意)
はやくもつてこい。

‘か・や・さ・よ・い’の類は、体言にも用言にも副詞にも、いろいろの語につく。

今日もまた雨か。
今日は休みか？
君はうどんか？
そうさ、勿論本当さ。
子供にやるのさ。
おもしろかつたかい？
むごいことをいう人や。

終助詞は、元來間投的なもので、感情的色彩をそえるだけのものだったが、その位置が、述語となる用言についていろいろの意味をそえるところから、用言との関係が密になり、用言の述語としての陳述性に関係するようになる。いみからいうといろいろで、たしかめ、いいつけ、禁止、うたが、い、などがある。いいつけ、禁止、うたが、いなどは、感情というよりも意向に関するもので、単なる感情的色彩より以上のもの、むしろ情意的色彩というべきものである。さらに、うたが、いは知性的なものであり、意志的なものである。これは、すでに陳述の世界に関係し、論理的大筋に関係している。述語のなすべき陳述の仕事の一部わけもつているのである。

終助詞は、このように、感情的色彩をそえるにすぎないものや情意的色彩をそえるものから、さらに文の陳述に関係するものまである。たしかめ、つよめをあらわすものから、禁止やうたが、いをあらわすものまである。ことに、禁止とうたが、いとは、陳述の重要な部面をなし、この部面は、この終助詞を用いてのみあらわしうるのであるから、終助詞の役目は大きい。この役目に相応じて、これにつづくべき用言(活用語)は語形を変えて接続する。

泣くな(禁止)
泣くか(疑い・反語)
泣きな(いいつけ)

西洋語では、これらの陳述にあたっては、語順をかえることになつている。それほど重要な陳述なのであるが、日本語では、その際終助詞の添加をもつて、これをあらわす。これをみても終助詞がどんなに大きく陳述に関係し、陳述を支配しているものであるかがわかる。

14

格助詞 が の に を へ と より から で

つづく助詞 体言→につく。 文中にある。

体言について他に つづいてゆくものには、体言につづいてゆくものと用言につづいてゆくものと、2種類がある。

まず、体言について、体言につづけるもの。[体言]→[体言] それは連体助詞と並立助詞である。ただ、並立助詞は対等関係でつづけ、連体助詞は従属関係でつづけるというちがいがあ

つぎに、体言について、用言につづけるもの、体言●→用言 それは格助詞と係助詞である。どちらも文の論理に関係しているが、格助詞はその論理関係における体言の格——主として主語・修飾語の位置をあらわすもの、これに対し、係助詞は文の論理の帰結である用言の陳述に関係し、その方向を前ぶれるために文中にはさまれるもの、したがって格助詞は前の体言にひかれ、係助詞は用言にひかれる傾向がある。

格助詞は、体言について用言につづけるもので、体言が用言につづくばあいのいろいろの関係をあらわす。用言につづくか否かが格助詞をみわける要点である。

さぎをからすといいくるめる。(格助詞)

君と僕(並立助詞)

からすのなかぬ日はあつても(格助詞)

梅の花(連体助詞)

‘の’は‘が’と同じ意味のもので、主語をあらわす。‘で’は‘において・を以て’と同じ意味のもの。

試験ていそがしい。(格助詞)

波もしずかで、つりには好適の日和だつた。(形容動詞)

係助詞‘は’、副助詞‘まで’から出て、格助詞化したものがある。たとえば、

あの男はよくやる。(係助詞)

十月革命は1917年におこつた。(格助詞)

東京は人口が多い。(格助詞)

そうまでいうならやらせてみたらどうか。(副助詞)

そこまでは気がつかなくつた。(副助詞)

朝から晩まで(格助詞)

東京から大阪まで(格助詞)

主語をあらわす‘は’は格助詞、‘より、から’に対する‘まで’は格助詞とする。元来は格助詞でないが、用法がずれて格助詞化したもの。

格助詞は、互いに重ならない、格助詞‘へ・と・から・で・まで’に‘の’のついた‘への・との・からの・での・までの’などは、格助詞に連体助詞のがついたものとする。連体助詞のあらわす属格(生格)は格にかぞえられるが、文に関係し、論理に関係するものでなく、単に語にだけ関係するものである。体言について用言につづける格助詞とちがひ、体言について体言につづけるものである。それで、この格は別に扱い、連体助詞として立てている。格助詞は、準体助詞には、そのあとにつく。

赤いのがほしい。

接続助詞 **ば と て が ところが のに ので ところて ものものを ても ても から なら(ば) けれど(も) けど し たり**

つづく助詞 用言につく。文中にある。用言について、その用言が他の用言にどんな関係でつづくかを示す。一文の中に二つの述語のあるとき、その述語と述語との関係をあらわす。文中の二つの句の事実に対する話し手の認定のしかたを示す。

雨がふれば、やめる。

雨がふつても、やる。

助詞の分類

この種の助詞は、対等関係で接続するものと従属関係で接続するものとのわけることができる。対等関係で接続するものは、たとえばつぎのようなもの。

雨はふるし、子はなくし、
行つたり、来たり、

いつも用言につく。用言が二つ以上あつて、その用言間の関係をあらわし、一文の論理に関係するものである。並立助詞化しているが、並立助詞は体言につくのに対し、接続助詞は用言につく。それ故、これらは接続助詞の一種とする。

従属関係で接続するものは、また、条件づけられない接続と条件づけられた接続とにわける。条件づけられない接続は平接といい、条件づけられた接続はさらに順接と逆接とにわける。順接は、さらに確定と仮定とにわけ、逆接も、さらに確定と仮定とにわける。

まず平接では **が・と・ところが** がある。‘そして、それから’ というほどの意味。

いまおつしやつたことについて考えたんですが、恋愛結婚だから平和な家庭をつくつてゆかれないことはないと思います。

一キロほどゆくと、森がみえてきました。

つぎにあげる ‘が’ は、あとをいわずにきつてしまい、あとを推定させるふくみをもつ。こんな用法から出て、‘が’ でいいきり、不確定のいみをあらわす終助詞に転ずるものが生れる。

それはちよつとこまるんですが。

要するによく理解しあつてから結婚することだと思ひますが、それではつぎに見合結婚についてご意見を伺つてみましょう。

あいにく、いま、きらしているんですが。

これと同じようなものに ‘けれど、けど、し’ がある。いずれも接続助詞→終助詞化したもの、はつきりいいきるのをはばかつて、あいまいにぼかして表現し、あとを推定させるものである。

もうかえりますけれど。

順接では、**から・ので・て・し** (以上確定) **ば・たら・と** (以上仮定)

今行くから、まつてろ。

ほかにあてもないし、それでは一しよにゆこう。

逆接では、**が・けれども・のに・ところで・ものの** (以上確定) **ても・でも・たつて・ところで** (以上仮定)

気はあせるが、足がいうことをきかない。

どんなにふつても、ゆく。

日本語の性質からいつて、助詞の多くは、離してかくのが自然である。わかちがきにおいて、大ていの助詞は、はなしてかいてよい。ただ、接続助詞のあるものだけは、つけてかく。それは、用言の音便形にとけこんだもの、たとえば ‘naitatte, itte, ittemo, tondari hanetari, ittara’ などの ‘て・たり’ の類と、連濁で用言にとけこんだもの ‘yukeba’ の ‘ば’ である。

接続助詞は、互いに重ならない。

接続助詞のなかには、独立して文のはじめに用いられるものがある。‘が・けれども・ところで’ など。これらは助詞が独立して、接続詞になつたもの。

並立助詞 と や やら に だの なり か わ の
つづく助詞 体言につく。文中にある。

二つ以上のことがらを対等につづける——つまり並立させるもの。接続助詞の中にも、対等につづけるものがあるが、接続助詞は用言につく。そして文の論理に関係する。これに反し、並立助詞は対等につづけることは同様であるが、体言につくことと語と語を並立させることとしかしないので、これらの点がちがっている。並立助詞は、概念の対立（並立）をあらわして、全体として之を一つの体言的なものとするはたらきがある。そして、体言的なものとして、主語にも述語にも修飾語にもなるのである。

見るときくとは大ちがい。
 どうやらこうやらやりとげた。
 西からと東からと選手がそろつて入つてきた。
 あれやこれやと思案する。
 赤に青に白。
 豚だの雞だのを飼う。
 君なり僕なりがゆけばよい。
 できるかできないかやつてみよう。
 雨はふるわ風はふくわ
 ああこののと文句ばかりいう。

一般に並立助詞はつぎへつづけてゆく意味をもつが、最後につく並立助詞は、そこからさきへつづける意味をもたず、ただまえからつづいてくる意味を受動的にうけとめるだけのこととしかしない。このため、意味が自明のときは、その最後の助詞をはぶくことがある。口調の上からもはぶくことがあるが、しかし、はぶいたために意味が不明になり、かかりぐあいのはつきりしなくなるようでは、最も大事な論理を混乱させることであるから、たとえ口調はわるくても、なるべくはぶかない方がよい。慣用となつた語句で、最後の助詞をはぶいているのは別である。

あれよあれ（よ）といううちに、……………
 蝶よ花よとかわいがる。
 うりやなすびの花盛り。

並立助詞は、互いに重ならない。

並立助詞は、格助詞には、あとにつくこともあるし(1)、まえに立つこともある(2)。

兄からと弟からと手紙が来た。君になり僕になりいつてくれればよい。(1)

兄と弟とから手紙が来た。君なり僕なりにいつてくれればよい。(2)

(2) のばあい、□全体が一体言となり、その体言に格助詞がついたもの。同様にして、(1) においても、‘兄からと弟からと’‘君になり僕になり’が全体として一体言となり、修飾部となると考えられる。

並立助詞は、副助詞には、すぐまえに立つ。

AかBかだけに話してくれるとよかつた。

これも □全体が一体言となり、それに副助詞がついたもの。

並立助詞は副助詞によくにている。あることばにそれがついて、全体として体言的なものになるはたらきがにている。‘やら・か’など並立助詞と副助詞に共通のことばもある。人によつては並立助詞の大部分を副助詞にいれ、‘と’だけを格助詞に入れる。しかし、副助詞はそれ自身きれつづきの明らかでない助詞であるが、並立助詞はいつもつづく助詞であり、いつもつづく意味をもっている。

助詞の分類

どうやらこうやらやりとげた。(並立助詞)

だれやら来たらしい。(副助詞)

ペンか鉛筆かをかして下さい。(並立助詞)

なにかうまいものはないか?(副助詞)

‘と’は並立助詞にも格助詞にもあるが、格助詞‘と’は‘引用のと’であつて、体言について用言につづくもの。

‘動物を大気圏外に打上げることになろう’といつた。(格助詞)

私の名はおつと申します。(格助詞)

もし並立助詞の‘と’を格助詞‘と’にいれてしまつて格助詞一本とすると、つぎのように格助詞同志が重なることになる。(‘から’は格助詞)

西からと東からと 西と東とから

しかし、格助詞同志は互いに重ならないから、このばあいの‘と’は別種のものとしなければならない。この‘と’は格をあらわしているのではなく、ただならべつづけているだけである。——すなわち並立助詞である。

二つのことがらをならべつづける点で、並立助詞は連体助詞‘の’にちかい。どちらもつづく助詞である。ただつづけ方がちがう。並立助詞は対等的につづけるが、連体助詞は従属的につづける。

17

連体助詞の

つづく助詞 体言につく。文中にある。連体助詞は体言について体言につづく。つくのは体言ばかりとはかぎらず、体言のほか連用語(準用言)にもつく。連用語というのは用言につづくべきことば。たとえば‘友人との約束’において‘友人と’は連用語である。これは‘友人と約束する’といった副詞的な意味で用言につづくべきことばだ。‘弟への手紙’の‘弟へ’は‘弟へ出す’といった意味で用言につづくべきことばだ。これらの連用語は体言的というより用言的なもので、準用言といえるだろう。これらの準用言につく点が格助詞とことなる。格助詞は体言にだけつき、そういうものにはつかない。

何よりの好物

父からのことづて

行けとの命令

すんでのこと

つづくのは体言につづく。だから、連体助詞は体言から体言へつづくわけであるが、体言から体言へつづくものには、まだ並立助詞がある。しかし、並立助詞は対等につづき、連体助詞は従属的につづくというちがいがあつた。

格助詞は互いに重ならないが、連体助詞は格助詞に重なる。‘友人との約束’‘父からのことづて’それゆゑ、連体助詞は格助詞でなく、別種のものとしてされる。格助詞に重なるといつても、すべての格助詞に重なるのではなく、一部の格助詞に重なる。主格や与格や対格などの主要な格には重ならない。主格を直格と考えるならば直格からみればかなり傾いた斜格にだけ重なる。このことは格助詞が文の論理的筋に関係し、連体助詞は語と語とのつなぎにのみ関係するという役目のちがいがから来ている。このように少しばかり性質のちがうところがあるので、連体助詞を格助詞から別

にとりわけたが、考えようによつては、格助詞より連体助詞の方が起源が古い、連体助詞の方が古参者であるといえる。

連体助詞は、格助詞には、そのあとにつく。

連体助詞は、副助詞には、そのあとにつく。‘かくだけの手間’ ‘それほど・までの決心’

連体助詞は、間投助詞以外の助詞には、そのあとにつく、間投助詞には、そのまえに立つ。‘弟からのね、手紙が来たのでね、……’

18

係助詞 は も こそ さえ でも しか(…ナイ) ほか(…ナイ) なりと
だって ったら って

つづく助詞 いろんなことばにつく。文中にある。

僕は、だめです。

日曜は、家です。

人も同様、私も同様。

金さえもうければいい。

それしかもついでない。

新聞でもよんでいて下さい。

東京ってひろいんだな。

いろんなことばにつくというのは、述語たる用言につづいてゆくべきことば、——すなわち連用語につくのである。それは主として体言である。その体言が用言につづくつぎぐあいに制限をくわえたり、色あいを加えたりする。実は用言の陳述に力をおよぼし、陳述を限定するのである。しかし、文の主要な大筋である論理を直接、になうのではない。文の成立に主役を演ずるのではない。それは主語述語のすることである。少し関係するだけである。格助詞は、主語やわき役たる修飾語の述語に対する関係をしるしづけるものである。ところが、係助詞は主語から述語にかけての論理の結着である陳述に関係して、その前ぶれ・道しるべをする。陳述が肯定か否定か、確定か、推量か、疑問か、反語かについて、行先案内のカンパンをかけているようなものである。そういういみで、色あいを付け、いみを強めているだけであるから、係助詞をとりのぞいても、行先案内のカンパンをとりのぞいただけで、行先きに変更はおこらず、本筋はそうかわりがない。しかし、係助詞をとりのぞくと、そのあとに、‘の’とか‘が’とか‘を’とか‘に’とか、格をあらわすものを補わないと、うまくことばがつづかないことがある。‘これはうまい’の‘は’をとつても意味は通ずるが、つぎのような‘は’は、とつてしまうと、いみがつづきにくくなる。

山は青きふるさと、水は清きふるさと

こういうときには、そのあとに‘の’とか‘が’とかをいれると、通じやすい。

係助詞は、互いに重なることがない。ただ、は・もだけが同類の助詞のあとにつく。

今日こそ・は勝つてみせる。

一目なりと・もみたい。

鳥さえ・も通わぬ。

係助詞は、格助詞には、そのあとにつく。ただ、がのあとにはつかない。

私には、わからない。

雲よりも白い。

ここからしかみえない。

散歩にでもゆこう。

係助詞は、副助詞には、そのあとにつく。

これだけしかない。

係助詞は、接続助詞のわずかのものには、そのあとにつく。

考えてさえいない。

それを案ずればこそいうのだ。

副助詞 **ばかり** **まで** **など** **やら** **だけ** **くらい** **ほど** **か**

きれつづき不定の助詞 いろんなことばにつく。文中にある。体言・用言・連用語につく。まず、体言・用言につくばあい、これとともに文節構成要素（語）となつて、体言と同じように用いられる。体言的語句となる。その体言的語句の末尾の要素を構成するはたらきは準体助詞にしている。……………(1)

まえの体言・用言とともに全体として体言となるから、そのあとへ指定の助動詞‘だ’とか格助詞‘が・に・を’などをつけて、うけることができる。

君だけにしらせる。

口のすぎるだけがきず。

そればかりが心配だ。

10センチばかり出ている。

何をいつてもわらうばかり。

つぎに連用語につくばあい、用言につづくべきことばから用言へのつづき様に対し、ある意味をそえる。このばあい、連用語と用言との間にわりこむ形をとる。……………(2)

私にだけしらせてきた。

‘私に’は‘しらせる’につづくべき連用語。それらのあいだにわりこんだ形で、‘だけ’がつく。

そうまでいうなら、やらせてみたらいい。

‘そう→いうなら’とつづくべきことばに‘まで’をわりこませたもの。

どこへかいつてしまった。

‘どこへ’も連用的なことば。

君にくらいは相談しそうなもの。

‘君に→相談する’とつづくべきことば。これらの連用語（準用言）と用言とのあいだにわりこんだものである。

連用語につくばあい(2)でも、この助詞は用言の方へかかるというよりも、連用語の方へつく力がつよい。連用語とともに全体として体言的にはたらく気味がつよく、連用語がもともとついていた連用的なつながりをよわめる傾向がある。副助詞がわりこむまえは、連用語と用言との間に連用修飾関係が成り立っていたが、副助詞がわりこむと、まず連用語にとりつき、連用語とともに体言的語句をつくり、連用語の連用関係を妨げ、連用語を凍結させてしまう。副助詞のはたらく力は専ら、それがつく相手の連用語にむけられている。副助詞は用言の属性にかかり、係助詞は用言の陳述性にかかるといわれるのは誤りであろう。副助詞が用言にかかっているとみられるのは、副助詞がつく相手の連用語が用言にかかっていたから、その連用修飾作用を副助詞のそれであるかのように誤認するのである。この助詞の由来をみても、多く体言から転成しておる。それもみな計量を示す体言である。この助詞の意味も、計量的な意味；はかり、かぎる意味が多い。副助詞は体言的用法

(1)と連用的用法(2)とをもつが、結局体言的用法(1)がその本質なのである。体言的な語句をつくるのがこの助詞の特徴だ。^{※5}

水 のむ。
 水ばかり のむ。
 ただ 水ばかり のむ。
 十円 たりない。
 十円だけ たりない。
 ほんの 十円だけ たりない。

上の例は、副助詞がそのつく相手の体言をとりこにし、連体詞や副詞とともに、前後からこれをめざして体言化し凍結させているおもむきを示している。さて副助詞は体言的語句をつくつて、ただその体言的語句としてとどまることもあるし、さらに、その上で連用修飾にたつこともある。

心配するほどのことはない。
 きこえるのは波の音ばかり。
 ちよつとみるだけ。
 ちよつとだけみせて下さい。

つぎの例は、副助詞が計量的な意味をもつことを示す。不定というものも一種の限定であり、かぎりはかることにかわりがない。

なにかうまいもの（‘か’は疑問の語について不定をあらわす）
 何が何やら見当がつかぬ。（‘やら’は疑問の語について不定・推量をあらわす）
 何処までいつたやら……
 庭なども手入れがゆきとどいている。（‘など’は例示のいみ）
 親類までよりつかぬ。（‘まで’は範囲の及ぶ限りをあらわす）
 東京から大阪まで（格助詞‘まで’は具体的）
 積めるだけ積もう。（‘だけ’は程度・限度をあらわす）
 すきとおるぐらい白い。（‘ぐらい’は分量・程度をあらわす）
 三つぐらいが丁度よい。
 私ほどの無精者はありません。（‘ほど’は分量・程度をあらわす）
 四つほどにきる。

副助詞は、互いに重なることがある。

それほど・までいうなら、……
 ここまで・ぐらいは来れそうなもの。

ただしいい方ではないが、‘これだけ・だけ’ということが、あるが、まえの方の‘だけ’は副助詞→単体助詞化したものとみられる。

副助詞は、格助詞には、そのあとにつく。

君にだけしらせる。
 君だけに（単体助詞‘だけ’）

副助詞は、接続助詞のあるものには、そのあとにつく。

いそいでまでするにおよばぬ。
 ないてばかりいる。

副助詞は、係助詞には、そのまえに立つ。

これだけしかない。

準体助詞のぞからながらがてらままきりぐるみごとともどころ

きれつづき不定の助詞 体言・用言につく。文中にある。体言にも、用言にもついて、全体としてある品詞の資格を生ずる。それがついてできる文節全体にある品詞の資格をあたえるのである。そのもとの語は、この助詞をつけることによつて、文節をつくる上に、ある品詞と同じはたらしきをする。あるいはその助詞をつけただけで、あるいはさらに助詞をつけて、あるいはきれぬ文節を、あるいはつづく文節をつくる。だから、この助詞は文節のきれつづきに直接関係するものでなく、むしろ文節構成要素（語）に関係するものである。

この助詞は接尾語とにているが、接尾語とはつぎの点でちがう。ある語に接尾語がつくと、その語を純粹の一定の品詞にしてしまう。もとの語が名詞であつても、動詞をつくる接尾語がつくと、純粹の動詞にしてしまう。春→春めく。もとの語はもとの品詞の性質を失ひ、あたらしい品詞にかわる。これに反して、ある語に準体助詞がつくと、その語のもとの品詞の性質を保ちながら、なおもう一つのあたらしい品詞の性質をもつということになる。こうしてつくられた文節は、まえの文節からのつづき様は、もとの品詞の性質を保っている。しかしその文節自身では、その助詞によつて生じたあたらしい品詞の性質をもつ。

あつ さ — 非常なあつさを 我慢する。

あついの — 非常にあついのを 我慢する。

準体助詞のついた‘あついの’は、まえからのつづき様は、‘あつい’という用言の性質を失わない。それゆゑ、さき立つことばも‘非常に’という連用形で‘あついの’にかかつてゆく。また‘あついの’は、文節のなかでは、‘の’によつてあたえられた体言の性質をもつ。それゆゑ、体言にだけつく格助詞‘を’がそのあとについている。このように‘あついの’は体言の資格をあたえられて、しかも、体言になりきらない。これに反して、接尾語のついたものは純粹の一定の品詞になりきつてしまうから、まえからのつづき様でも文節それ自身のなかでも、品詞は一致している。‘あつ・さ’は‘さ’によつて体言の資格があたえられ、さきに立つことばも連体形‘非常な’で‘あつさ’にかかつてゆき、‘あつさ’自身も体言であるから、格助詞‘を’でうけられる。

もとの語の品詞とこの助詞によつてあたえられる品詞とがいつも別とはかぎらない。同じであることもある。つぎの例において、‘僕’も体言であり、‘僕の’も体言である。

それは僕のだ。

この種の助詞をわけると、体言の資格をあたえるものと副詞の資格をあたえるものとにわけることができる。副詞の資格をあたえるものを仔細にみると、体言的なものとなつた上で、副詞的にはたらしき、つぎに来る用言を連用修飾していることがわかる。

体言の資格をあたえるものには、つぎのような助詞がある。

赤いのがよい。（‘もの・こと’のいみ）

ソ連からののもアメリカからののも（格助詞のついたものにつくこともある）

誰ぞにいいましょう。

何ぞすることはないか？

‘ぞ’は疑問の語について不定の意味‘ある人・あるもの・あること・あるところ’をあらわす。‘ぞ’は意味上副助詞‘か’ににている。しかし、副助詞‘か’は格助詞に対し、その前後いずれにも来る。そして主としてはそのあとに来る。ところが準体助詞‘ぞ’は、格助詞には、決してそ

のあとに来ず、そのまえにだけ来る。

どこかに どこにか
どこぞに

これを‘どこにぞ’とはいわない。だから‘ぞ’は副助詞ではない。‘どこかに’の‘か’は実は副助詞→準体助詞化しているのである。正当には‘どこにか’というのが副助詞らしい副助詞である。それと同じような配置で‘どこにぞ’ということはたえていわないから、‘ぞ’は副助詞といえず、これはやはり準体助詞というべきである。

10トンからの重さ（……以上の意）

そういうからには、……

ついてからが大変（……以後の意）

これまでにあらわれた助詞の‘から’をまとめると、3種類になる。

理由のから 接続助詞 練習しますから集つて下さい

方向のから 格助詞 上から下まで

以上のから 準体助詞 10トンからの重さ

副詞の資格をあたえるものには、つぎのようなものがある。みな用言につづいてゆく。

枝ながら見よ。

われながらおかしくなる。

わが子ながらあつぱれとおもう。

歩きながらくう。

牛ひきながらうたう。

小さいながらよくはしる。

涼みがてら河原に出る。

散歩がてら植木市にゆく。

入つたまま出てこない。

そのまま出して下さい。

くつばきのまま上る。

それきりとだえた。

のぼつたきり帰つてこない。

家族ぐるみたたかう。

皮ぐるみたべる。

身ぐるみはぐ。

皮ごとたべる。

テーブルごとひつくりかえす。

二人ともたすかつた。

三人が三人とも合格した。

この種のもの‘ぐるみ、ごと、とも’などは、特に限られた語にしかつかない。主に体言にだけつく。それのつく相手が限られているところから、普通これらは接尾語として扱われる。その点は同性質だ。しかし、接尾語なら、そのついたものは全体で一つの新しい品詞になりきってしまうが、この種の助詞のついたものは、副詞的にはなっているが、しかし、なお体言的性質を失っていない。‘皮ぐるみたべる’において‘皮ぐるみ’は副詞的であるが、しかし、なお体言的性質を失わない。全く副詞になりきらないところが接尾語とちがう。

また、この種のものは接続助詞ににている。‘歩きながらたべる’の‘ながら’などは接続助詞とみられることもできる。けれども、接続助詞はいつも用言につくが、この種のものは体言にもつく。たとえば‘われながらおかしい’とか‘子供ながらよくやる’などとつかう。それから接続助詞は語と語、句と句とを、同等のものとしてつなく。‘往つてかえる’‘訪ねたが、あいにく留守だつた’という風に、対等関係であれ従属関係であれ、語句と語句とを同等につなぐが、準体助詞はそうでない。‘歩きながらたべる’は‘歩く’と‘たべる’とをならべているのではない。‘歩きながらたべる’のであつて、‘歩きながら’はほとんど一語である。‘皮ごとたべる’の‘皮ごと’もほとんど一語である。‘ながら’や‘ごと’はたしかに接尾語（語構成要素）にちかい。それに反して接続助詞は完全な一語である。接続助詞は直ちに文節のきれつづきに関係するが、準体助詞は文節構成要素（語）に関係するばかりで、直ちに文節のきれつづきには関係しない。‘皮ごと’の‘ごと’は‘皮’に密接に関係するばかりである。全体として体言的になつたその上で、‘たべる’にかかつてゆく。間接的に文節のきれつづきに関係する。

21

助詞分類の体系 助詞の種類は以上9種類をあげた。これをまとめて体系的な分類をするならば、どうなるか。分類は、その分類の結果が大事である。名詞なり動詞なりが文法上ちがつた性質をもっているが、それらは一体どうちがうか。こういうのが問題の中心になる。

文の構成要素は文節、文節の構成要素は語であるとする、あらゆる助詞を、文節が文を構成するばあいの性質に関するものと、語が文節を構成するばあいの性質に関するものとのわけることができる。すなわち文節の性質に関するものと語の性質に関するものとのわけることができる。

まず**文節の性質に関するもの**からいうと、文節のきれつづきの性質には3種類があつて、一つはきれぬ文節、二つはつづく文節、三つはきれつづきが明らかでない文節と、この3種類がある。文節のきれつづきには助詞が関係する。その**きれぬ**には文を終止するものと、文節を終止するものがある。文節を終止するものは、文を中止するだけで文を終止することはしない。文を終止するものは**終助詞**、文節を終止するものは**間投助詞**である。その**つづく**には、接続の関係でつづくものと、接続以外の関係でつづくものがある。接続の関係でつづくものには、用言につくものと、いろいろのことばにつくものがある。用言につくものは**接続助詞**、いろいろのことばにつくものは**並立助詞**である。接続以外の関係でつづくものには、体言につくものと、用言につくものがある。体言につくものは**連体助詞**である。用言につくものは、体言について用言につくものと連用語について用言につくものがあり、体言について用言につくものは**格助詞**、連用語について用言につくものは**係助詞**である。その**きれつづきが明らかでないもの**には、**副助詞**がある。

つぎに、**語の性質に関するもの**についていうと、文節構成要素の性質または資格をあたえるものとして**準体助詞**がある。このものは一応体言の資格をあたえるのであるから、文節構成要素としての性質は、きれつづきが明らかでない。けれども、そのうちに二種がわかれ出、一つは体言の資格をあたえるものと、も一つは副詞の資格をあたえるもののができた。体言の資格をあたえるものは、やはりきれつづきが明らかでない助詞である。副詞の資格をあたえるものは、つづく助詞である。⁴⁶

22

助詞の接続 ちがう種類の助詞がつづくとき、助詞の性質によつて一定の位置がきまつていゝる。これをまとめるとつぎのとおりである。

助詞の接続表

体言 準体言 副詞	— 準体 — 格 — 並立 — 副 — 係 —	— 連体 — 間投 — 用言 — 終
用言 準用言	— 接続	— 副 — 係 — 間投
たのん	で	までも さ
これ		だけは たのむ よ
あなた	に	だけでも しつてもらいたい
それ		ほどまで いうなら
100円		だけは ある
1円		も ない
君	だけに	は 打明けよう
僕	の に	ばかり 当る

わかちがきと助詞 日本語のわかちがきはこれからの問題であるが、助詞はそのわかちがきに大いに関係がある。体言・用言・副詞・感動詞をわけてかくべきことはいうまでもない。それらは自立した語であるからだ。のこる辞が問題だ。これは付属語だから、まえの語にくっつけてかくところの文節単位のわかちがきも考えられるが、それは日本語の性質に合わない。なぜかという、日本語の辞は、語尾のように融けこみ、屈折したものでなくて、ややはなれて、添うものである。それでは、辞をすべて、はなしてかくかという、そういうこともできない。辞はそんなに独立したことばでもない。そこでどの辞をはなし、どの辞をつけるかが問題になる。私は次のような原則でつけはなしすればよいと考える。

1. 詞ははなす。(形容動詞は第3項にしたがう)
2. 辞ははなすものをつけるものがある。
3. 助動詞のうち、体言につくものははなす。用言につくものはつける。
4. 助詞のうち、接続助詞・係助詞の一部は、つける。その他の助詞は、はなす。
5. 接続助詞・係助詞のうち、音便形や連濁の形にとけこんだものは、つける。(て・で・ば・たら)など。その他は、はなす。
6. 接尾語はつける。

助詞は最初、間投的に、語と語との間に、または文のおわりに投入されたものである。だから最初から遊離した要素であつた。そのうち、語尾にとけこみ、屈折的に変化する機会もあつたが、結局そうならぬでおわつた。

Hana'n saityoru. 花がさいて居る。
 Okyaku'n kiyotte ná お客が来よつてなあ。
 Toryô toru. 鳥をとる。

これらの方言は、大和や九州の、古い伝統のある地方で、はなされているが、'花ん' だの 'お客ん' だのというのは、あきらかに語尾に 'ん' がとけこんでいる。しかし、日本語は、平板に単調に等時拍音形式ではなされ、開音節であるという音韻上の特質をもつから、助詞が詞の語尾にとけこむ可

助詞の分類

能性はごく少ないのである。助詞は詞につくといつても、西洋語の格変化の語尾のようにではなく、むしろその前置詞のようにつくとか、あるいはそうのである。ただ、前置でなく後置されてつく。詞のあとに少しはなれてつくのである。だから、助詞の多くは、はなしてかくべきものである。

わかちがきの問題は助詞のわかちがきの問題が中心になる。これは、一般にはまだまださきのことであるが、電子計算機やオートメーション化が行われて、一部ではこれが問題になつている。いま一般につかわれている漢字かなまじりのかきかたは、十分わかちがきの代用をする。漢字かなまじりで表記している限り、わかちがきの必要はない。しかし、この表記法が非合理的非能率的であることは明白なことで、早晚何とかしなければならぬ問題である。漢字かなまじりにおいては、漢字が支柱になつている。日本人はこの漢字をだんだん疎みはじめていく。若い人はだんだんおぼえなくなつてきた。若い人は漢字を知らない。またおぼえようとしなない。これは時代が漢字を必要としなくなつていっているのであつて、ひとり国語教育や教育法のつみではない。現代は昔風の国語教育や教育法をゆるさなくなつていく。人工頭脳が動き出した時代に繁文褥札の漢字は間に合わなくなつたのだ。時代のなりゆきとして、若い世代はどんどん漢字を無視しおぼえなくなつてゆき、漢字のもつ古めかしい味がどんどんこわされ、忘れられてゆくのは、古い世代にとつて、残念なことであるが、これは漢字を知つている者だけがもつ未練・郷愁にすぎないかもしれない。優美なきものや下駄や日本髪がすたれて、せびろやくつやパーマがはやる世の中である。生活のしかたがこのように活動的に実用的に経済的にかつていく以上、漢字がはやらなくなるのは当然である。

漢字がすたると、かなが多く用いられる。実際かなタイプの文書や領収書が大分発行されておき、いやでも応でも、かながきの封書や領収書をうけとらされるようになっていく。文字の使用は何といつても実用方面、経済活動の方面が第一である。事務の自動機械化がすすむにつれ、電子計算機が字をよんだりかいたりするようになるにつれて、われわれはいよいよ文字改革の必要に迫られている。世界各国がローマ字でオートメーション化しているときに、漢字で立ち向うことは至難である。五万だの二千だのという多数単位の漢字をもとにして自動制御や自動記憶の装置をつくれぬことはないだろう。けれども、20字ぐらいの少数のローマ字をもとにしてつくられた簡単な機械に立ち向うことはできない。第一に能率がちがう。この方面から、漢字が敬遠され、過去の遺物にされる見込は十分にある。

漢字が用いられなくなると、音文字(かな)本位になる。かなばかりになると、よみづらいから、べたがきよりもわかちがきが必要になり、わかちがきになると、字数が多くてたてがつかえるので、よこがきになることは必須である。かなのべたがきはよみづらい。漢字はひとかたまりのかなに相当していたから、わかちがきの代用になつたが、それが消えると、いよいよべたがきになるから、語としてのひとかたまりをはなしてかくわかちがきが要求される。わかちがきをすると、たださえ字数の多いかながきが一層ながくのびるところから、視野のせまいたての方向よりも視野のひろいよこの方向へのばしてかくように要求される。たては視野がせまく、よこは視野がひろい。どの位ひろいか、たてにくらべてよこの視野は約3倍ひろい、両眼がよこに並んでいるからだ。そこで、かな本位にすれば、わかちがきが必要になり、わかちがきすれば、たてがつかえるので、よこがきが必要になる。

わかちがきにおいては、助詞のつけはなしが一番の問題になる。助詞の特質をしらべた上で、私はこう考える。——一部はつけ、大半はなしてかくことが適當である。いわば西洋語の前置詞のようにやや独立したもので、決して接尾語や語尾のように語にとけこんだものではない。しかし、一部分は接尾語のようになつていくから、つけてかくべきである、とこういう結論に達した。しか

し、これは現在の状態であつて、これからのち、助詞が融合するようになるのか、独立するようになるのか、一体どちらの方向に向うのかはわからない。-te' -'tari' のように前の語にとけこむものがふえるか、どうかは予断をゆるさない。

今後、かな本位になるか、ローマ字本位になるかがまた問題だ。かなのわかちがきがはじまると、ローマ字の語や略語がわりこみやすくなる。かなの中のローマ字の語はわかちがきの効果をたかめ、ローマ字はそれをもとにして、ますます用いられる一方で、決して後退することはないだろう。けれども、全面的に、国内的なかなをとるか、国際的なローマ字をとるか、どつちにふみきるかは、むずかしい問題で、因襲と合理とのたたかいであり、保守的感情と進取的意気とのかねあいによつてきまる。かな本位でよこがきでというところまでは、現代の電子機械文明の力でおしすすめられるだろうが、それからさきは、よほど社会の気風がかわらぬ限り、一歩をすすめることができないだろう。革新的なことを許さない保守的な社会では、たとえ合理的なことであつても、これを前進させることがないだろう。必ず伝統や因襲の力でひきもどしてしまふ。物質的なことについては積極的になるが、精神的なことについては極めて消極的だ。大胆に考え、大胆にいい、大胆に実行することをおそれる。なぜか、それは人々にとつて自分の存立の基礎が根底からほりくずされるように感じられるからだ。それに反して、道具や機械をつかうことは、自己の存立の基礎に影響するものでない。ますます自己の存在を豊かにとまらせるだけだ。汽車も汽船も航空機もテレビも、世界共通の道具はどしどしとり入れる。どんな保守的な人でもこれに反対はしない。ところが同じ世界共通の道具でも精神的道具になると、忽ち、反対だ・伝統の破壊だ、などといつてさわく。アラビア数字、メートル法、西洋紀元、ローマ字、……これらは世界共通のものであるが、機械をつかうようには簡単にゆかない。一度わが頭におぼえこまなければならぬという面倒がある。道具や品物のような外部のものでなく、この方は頭の内部のことだ。しかもわが頭の中には、漢字の数字や尺貫法や天皇の年号や漢字かなが先住している。これら先住者となれしたしんでの、はなれがたい気持がある。これをおい出すということになると、よほどの勇気がある。これが保守的な社会では、実行できないのである。しかし、こんなことはひとたび社会が前向きになり、向上的に進取的になり、みんなが大胆に考え、大胆にいい、大胆に実行するようになると、わけなくできることである。やる気にさえなれば、できるのだ。要するにこの保守的な後向きの社会においては、そこから一歩前進することがむずかしいとおもわれる。アラビア数字が日本に入つて100年になるが、このごろやつと公式に、よこがきアラビア数字をつかうようになった。郵便貯金通帳もやつとこのごろよこがきアラビア数字になった。けれども証書などは、いまでもたてがきの漢字数字だ。メートル法が行われて30年、まだ尺貫法は生きています。西洋紀元やローマ字になると、まだ議論の段階だ。これは社会が保守的だからである。これでは、30年たつても100年たつても、世界共通の道具はつかえず、不便をみるのである。物質的な品物を取り入れるならば、同時に頭をさわがす精神的手段もうけ入れなければならぬ。精神的手段が第一であり、それが物質的な品物をつくり出すのだ。和魂漢才ということは、昔のせまい受容者の立場であつた。われわれは新しい世界をつくり出すという創造者の立場にたつて、世界魂世界才で行かなければならぬと思う。

- 註 1) '畑の草'における'の'は、当然第2格をあらわす格助詞であるが、ここでは後にのべる理由によつて、連体助詞とする。格助詞および連体助詞の項参照。
- 2) 代名詞は起源の古いことばである。その変化も不規則で、名詞の変化にあまり似ない。日常よく用いる不規則助詞が不規則変化をして、普通の規則動詞の変化にあまり似ないようなもので、別種の体系と考えるべきである。
- 3) 橋本進吉博士の助詞分類は'国語法研究'の中におさめられている国語法要説(3)品詞の分類⁷⁸にみえている。これには'準副体助詞'という語がつかつてあるが、これは、のちに'連体助詞'と改

助詞の分類

められた。この‘国語法要説’が執筆されたのは昭和9年12月であるが、その当時連体詞というものが世に認められていなかった。博士はこれを副体詞とよび、副体詞ににたはたらきをする助詞という意味で、‘の’を準副体助詞とよんだが、おなじ‘国語法研究’83に‘場合によつて副体詞と関係せしめず、単に連体助詞と名づけてもよい。’とことわっている。同書後尾につけられた解説にみえる昭和13年の‘国文法体系論’発表当時には準副体助詞の名を用いず‘連体助詞’に改められたのであるが、解説はこの事実にふれていない。そのため、橋本博士の分類という、いまでも準副体助詞という面倒な名が通用している。博士はのちに準体助詞の一部を‘準副助詞’と名づけた。これは同書の解説にも紹介してある。‘準副助詞’をたてたときには、勿論ふるい準副体助詞の名はさけて用いなかつた。その時は、はつきり‘連体助詞’と名づけていた。

- 4) 語の意味は中心に存する事実であり、主観的なことがらだから、他から直接に知りたい欠点がある。だから、そういう主観的な区分にばかりたよることはできない。また、語の意味は、観念自身の性質や心理的必然や論理的必然によつて生ずるかという、そうではなくて、われわれの伝統的な考え方の習慣から来ている。ことばはもともと伝統的なもので、決して論理的なものでない。そういう点があるから、語をいみによつて区別するよりも、形にあらわれたはたらきによつて区別する方が正確であり、明瞭である。橋本進吉：国語法研究 67
- 5) この一節は私見である。副助詞は連用語について、連用修飾関係にわりこみ、ある意味をそえるだけだ、とされている。橋本：国語法研究 72 しかし、副助詞がつくと、音調が高まつて、それをふくめて、それよりまえのことばを体言的にするはたらきがある、と私は考えるので、この点を力説したわけである。
- 6) はじめ橋本博士は、準体助詞を、準体助詞と準副助詞とにわけたが、のちに準副助詞を係助詞の下位に入れた。係助詞をわけて、係助詞と準副助詞との二つとした。